歴史地震
第 21 号(2006) 201-217 頁
受付日 2006/1/17, 受理日 2006/3/10

寺院の被害記録から見た安政東海地震(1854)の静岡県内の震度分布

東京大学地震研究所* 行谷 佑一，都司 嘉宣

Distribution of seismic intensities of the 1854 Ansei Tokai earthquake in Shizuoka Prefecture estimated by the building damage records of temples

Yuichi NAMEGAYA and Yoshinobu TSUJI

Earthquake Research Institute, the University of Tokyo
Yayoi 1-1-1, Bunkyo Tokyo, 113-0032 Japan

We gathered records on buildings damage of 234 temples in Shizuoka Prefecture due to the 1854 Ansei Tokai Earthquake. On the other hand, we obtained the total list of temples which existed at the earthquake by the chronicles of the provinces in Shizuoka prefecture, which were issued in 1910s. We estimated seismic intensity locally at point of each temple by considering the ratio of damaged temples to the total in the area within the 2-kilometer circle area around it. Zones of seismic intensity more than 6 (in JMA scale) appear at six places: Numazu-Mishima area, the Plain of the mouth of the Fuji River, Shimizu Port, Yaizu Port and its western vicinities, Makinohara Plateau, and Iwata-Kaketsuka area. The area of heavy damaged temples at the mouth of the Fuji river coincide with the active fault of the Fujikawa on which the dislocation took place at the main shock of the 1854 Ansei Tokai Earthquake. The zone of seismic intensity more than 6 in Iwata-Kaketsuka area coincided with the area of a back marsh behind the eastern bank of the Tenryu River.

§1. はじめに

安政元年十一月四日五ツ半過ぎ（1854 年 12 月 23 日午前 9 時過ぎ），関東から近畿にかけて被害が生じた安政東海地震が発生した．この地震の静岡県内各地の震度については，飯田（1980）や宇佐美（1979）などが古文書に書かれた各村の被害状況から推定している．たとえば飯田 (1980) は，被害記録が残る町村ごとの震度を求めた．これによると，磐田市掛塚や袋井，掛川，相良，大井川町，清水，吉原，三島などで震度 7 の揺れであったことが報告されている．いっぽう，Tsuji (1987) は家屋の全潰率や寺院の被害記録から安政東海地震（1854）の震度を評価している．また，各寺院の住職に自寺の過去帳調査を依頼し，この地震で死亡したその寺の檀家の人数を得ている．

ところで，古文書に書かれた地震の被害記録から震度を見積もるには，各集落での家屋被害数や被害状況をもとに評価することが一般的である（たとえば，宇佐美ら，1994）．この場合，被害地域全体の震度をくまなく知るためには，地域全体におけるほぼ全集落の被害記録が必要となる．しかしながら，古文書記録にのみ頼った被害記録には集落による偏りがあるため，被害地域全域的に均質な被害状況を得るのは難しい（たとえば都司，1987）．すなわち，古文書の場合にはその現在までの遺存経過が偶発的であるため，震度を推定しうる地点には大きな偏りがあるのが普通であって，あまねく地域的に震度を推定することは難しい．言いかえると，古文書記録のみに頼った震度推定には地域的な偏りを避けることができないのである．

その点，寺院の建物被害に関する記録は，比較的均質に分布しておりさらにデータとしてより信頼のおけるものである．したがって，寺院被害から地震の震度を見積もることは地域による偏りを避けることができると言えよう．そこで，本研究は寺院の被害記録から震度を見積もる手法を提案し，その手法から安政東海地震(1854)の震度分布を求めることを試みた．

§2. 寺院被害記録から推定する震度評価の手法

2.1 寺院被害記録の性質

本研究で利用する安政東海地震(1854)の寺院倒潰記録は，その多くが大正年間に市町村誌を編纂するために，組織的に小学校の校長たちによって調査されたものである．それがさらに寺院明細帳や郡誌の形でまとめられており，これらの郡誌や市町村誌の原本は現在静岡市駿河区谷田の静岡県立中央図書館に保存されている．その情報の基となったのは，大正年間当時生存した住職たちの直

*〒113-0032
東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学地震研究所

接証言によるものが多い．すなわち，当時の住職たちの直接証言とは，大正年間に生存した住職たちにとってその約 60 年前に起きた安政東海地震(1854)の各自分の寺建物の被害状況であって，その信憑性はきわめて高いものであると考えられる．したがって，静岡県全体にわたって信憑性の高いデータがほぼ普遍的に分布しているのである．

2.2 寺院倒潰ポイント

つぎに，寺院被害記録のリストアップについて説明しよう．本研究で用いた，静岡県内の 1854 年安政東海地震による寺院被害に関する記録は，『日本地震史料』(武者，1951)，『新収日本地震史料』(東京大学地震研究所）シリーズの『第五巻別巻五ノ一』(1987)・『補遺別巻』(1989)・『続補遺別巻』(1994)，『日本の歴史地震史料』(宇佐美）シリーズの『拾遺別巻』(1999)・『拾遺二』(2002)・『拾遺三』(2005)，および『東海地方地震津波史料（Ｉ・下巻)』(都司，1979）である．とくに都司(1979)には，先述した静岡県立図書館所蔵の大正年間から昭和初期に刊行された郡誌をはじめ，市町村誌，および近年新たに刊行された市町村誌の中の寺院の項目に現れる地震記録が多く集められている．本研究で引用した寺院の被害記事は，この史料集から得られたものが多い．

われわれは上記の史料集を通読し，これらの中で静岡県内の寺院に関する被害記事を抜き出した．抜き出した記事は，純粋に地震の揺れによる被害のみを対象とし，火災や津波および土砂崩れなどによる被害記事は本研究では採用しなかった．以上の作業の結果，西は浜名郡新居町浜名の教恩寺から東は三島市川原ヶ谷の願成寺に至る，合計 234 の寺院についての地震動による被害に関するデータベース（付表）を得ることができた．

なお，個々の寺院の記録に基づいて被害状況をまとめるさいには，寺院の被害の度合いをあらわす「倒潰ポイント」を導入した．この倒潰ポイントとはのちに震度判定を行うさいに使用されるものであり，その決定にあたっては，次のような原則に従うことにした．すなわち，本堂，客殿，諸堂，庫裡などの寺院の主要建造物が，

（１）全潰であったとき，その寺院は全潰とみなし，倒潰ポイントを 1.0 とする．
（２）半潰であったとき，その寺院は半潰とみなし，倒潰ポイントを 0.5 とする．
（３）大破であったとき，その寺院は大破とみなし，倒潰ポイントを 0.3 とする．
（４）破損や中破であったとき，その寺院は中破とみなし，倒潰ポイントを 0.2 とする．
（５）小破であったとき，その寺院は小破とみなし，倒潰ポイントを 0.1 とする．

また，寺院の主要建造物が半潰か無記載で副次的な地蔵堂などの建造物が全潰の場合は倒潰ポイントを 0.8 とした．さらに，同一寺院において複数の主要な建物の被害記載があって，一部が全潰し他は破損ないし無事のときは全体として平均的に半潰とみなして，倒潰ポイントを 0.5 とした．門や鐘楼など地震で被害を受けやすい建物のみに倒潰などの被害が出たときには，その程度により倒潰ポイントを 0.1 ないし 0.2 とした．「再建」という情報がありそれが地震発生後 2 年以内の安政三年末までの場合には，倒潰ポイント 0.5 を与えた．ただし，再建されたのが地震発生の 3 年後である安政四年以降である場合は，倒潰ポイントを 0.3 とした．というのも，後者の場合には地震後も寺院建造物は多少なりとも機能していたと考えたからである．このほかのケースに関しては被害記録を総合的に判断することで処理をした．

付表では，一行ごとに一箇所の寺院の情報を載せた．すなわち付表では，左の欄から順に，所在地住所，寺院名，東経，北緯，倒潰ポイント，判定震度（後述)，原記載，出典，史料集名の略称とその掲載ページが記載されている．史料集の略称として，ハイフンの前には「5」か「36」か「補遺別」「続補遺別」か「拾遺別」のいずれかの記号が表れる．これらは,『新収日本地震史料第五巻別巻五ノ一』,『東海地方地震津波史料（Ｉ・下巻)』,『新収日本地震史料補遺別巻』,『新収日本地震史料続補遺別巻』および『日本の地震史料拾遺別巻』をそれぞれ表している．武者(1951)には本研究で用いた寺院被害史料は多くなかったうえ，これら五個の文献のいずれかに重複して表れているので，付表ではこれら五巻の史料の掲載ページ数で表示した．なお，史料によっては全壊の状況を「潰」の文字で表す場合や,「壊」の文字で表す場合がある．宇佐美（1996）はこの 2 文字のニュアンスの違いについて,「壊」より「潰」のほうが実感を表しているといえる，としている．しかしながら，われわれは史料の記録者自身が両者の文字を意識的に使い分けているとは考えられないので，両者

を同じ意味で扱い，本論文では「全潰・半潰」の文字で統一することにした．ただし，付表には原記録のまま記載した．

以上の作業を経て得られた倒潰ポイント分布図が図 1 である．図 1 では倒潰ポイントが，

・1.0 および 0.8 の場合は「全潰」●
・0.5 の場合は「半潰」◕
・0.3 の場合は「大破」◐
・0.2 および 0.1 の時は「中破・小破」⊕
・0.0 の場合は「被害なし」⦶

としてプロットした．

2.3 倒潰ポイントから震度を推定する方法

2.2 で評価した倒潰ポイントを用いて震度を見積もる方法について説明しよう．本研究では，まず倒潰ポイントから寺院倒潰率を算出した．この寺院倒潰率とは，震度評価をしようとしている寺院から半径 2km に存在する寺院の倒潰ポイントの加重平均値である．すなわち，着目している寺院の倒潰ポイントをもっとも反映させるため，平均値は単純な平均ではなく，距離の 2 乗分の重みを乗じた平均値として計算している．数式で表せば，寺院倒潰率 d は，倒潰ポイント c を用いて，

$$d = \frac{\sum wc}{\sum w}$$

と表せる．ここで，w は距離の 2 乗のモーメントで，

$$w = \left(1 - \frac{r}{r_0}\right)^2$$

であり，rは着目している寺院とその周辺の寺院の距離，r_0は震度評価に用いる寺院の限界距離で，ここでは 2kmである．すなわち，寺院倒潰率dの意味は，着目している寺院を中心に半径r_0に存在する寺院の倒潰ポイントの，距離の自乗に反比例した重みを考慮した平均を表す．このr_0 を 2kmと選定した理由としては，r_0が大きすぎるとその寺院のある場所のピンポイントとしての寺院倒潰率を求めるのに適当でなくなるからである．いっぽうr_0が小さすぎると，円内に入ってくる寺院数が少なくなって統計的な妥当性を欠くようになる．つまり，その寺院の被害のみが寺院倒潰率に反映されてしまう．この 2 点を考慮して，r_0=2kmという値を採用した．

ところで，大正年間に発行された各郡誌を読むと，被害記録は存在しないがその地震当時確実に存在した寺院が記録されている．確実に存在したと言い切れるのは，郡誌に寺院の開祖年が記されており，それらは安政東海地震(1854)以前であるからである．2.1 で説明したが，各郡誌は大正年間の住職の記憶が基になっている．60 年前に起きた安政東海地震（1854）によって自分の寺院が倒潰や半潰の重大被害を受けたのであるならば，先代からの伝承にしても記憶に残っているはずであり，その被害状況は郡誌に残るはずである．いいかえるならば，郡誌に寺の存在は書かれていても地震被害が書かれていない場合は，その寺は安政東海地震（1854）によって被害を受けなかった可能性が高い．そこで，われわれは静岡県内の各郡誌を調べ，安政東海地震（1854）時に存在した被害記録のない寺院を調べその緯度経度を読み取った．この作業は寺院の全数調査そのものであり，旧浜名郡，旧磐田郡，旧志太郡の一部，旧安倍郡，旧庵原郡，旧駿東郡，旧田方郡の一部の 1243 の寺院についてその位置を知ることができた．そして，これらの被害記録のない寺院を倒潰ポイント 0.0 として寺院倒潰率計算に取り入れた．なお，寺院の位置を知るには，『静岡県仏教会名鑑』（静岡県仏教会，1965）や『静岡県宗教法人名簿』（静岡県総務部学事文書科，1988），『静岡県の地名・日本歴史地名大系第二十二巻』（平凡社，2000），および『角川日本地名大辞典・22・静岡県』（角川書店，1982）が参考になった．

この倒潰ポイントの分布の拡大図（すなわち図 1 の拡大図）を，三島～由比，興津～大井川町，および天竜川流域についてそれぞれ図 2(a)～4(a)に示した．この図で○は，被害記録はないが地震当時寺院の存在が確認できた寺（倒潰ポイント 0.0）を示している．ただし，廃寺や移転などで地震当時の正確な位置を知ることができなかった寺院に関しては□で示している．これは，その寺院のピンポイントな位置は知ることができなかったが，どの集落（小字）に存在したかまで判明したため□で表した．誤差としては大きく見積もっても 1km 程度である．なお，廃寺により位置がまったく不明な場合は本調査からは除外したが，それはごく少数であった．

つぎに，この作業により求められた寺院倒潰率から震度を評価する方法を述べよう．

宇佐美ら（1994）は，江戸時代の住宅の家屋の被害率（＝（全潰家屋数＋0.5×半潰家屋数）/総数で定義）が 70％以上は震度 7 とし以下，40～70％，15～40％，1.5～15％および 1.5%以下をそれぞれ震度 6～7，震度 6，震度 5～6，震度 5 という基準で判断した．

ところで，腰原ら(2003)は社寺などの伝統的構法を用いた木造建築の，過去の地震における被害状況を整理することを目的にして，大正関東地震(1923)による鎌倉市内の社寺の被害について調査を行った．その結果，ある集落の社寺の全潰率が，

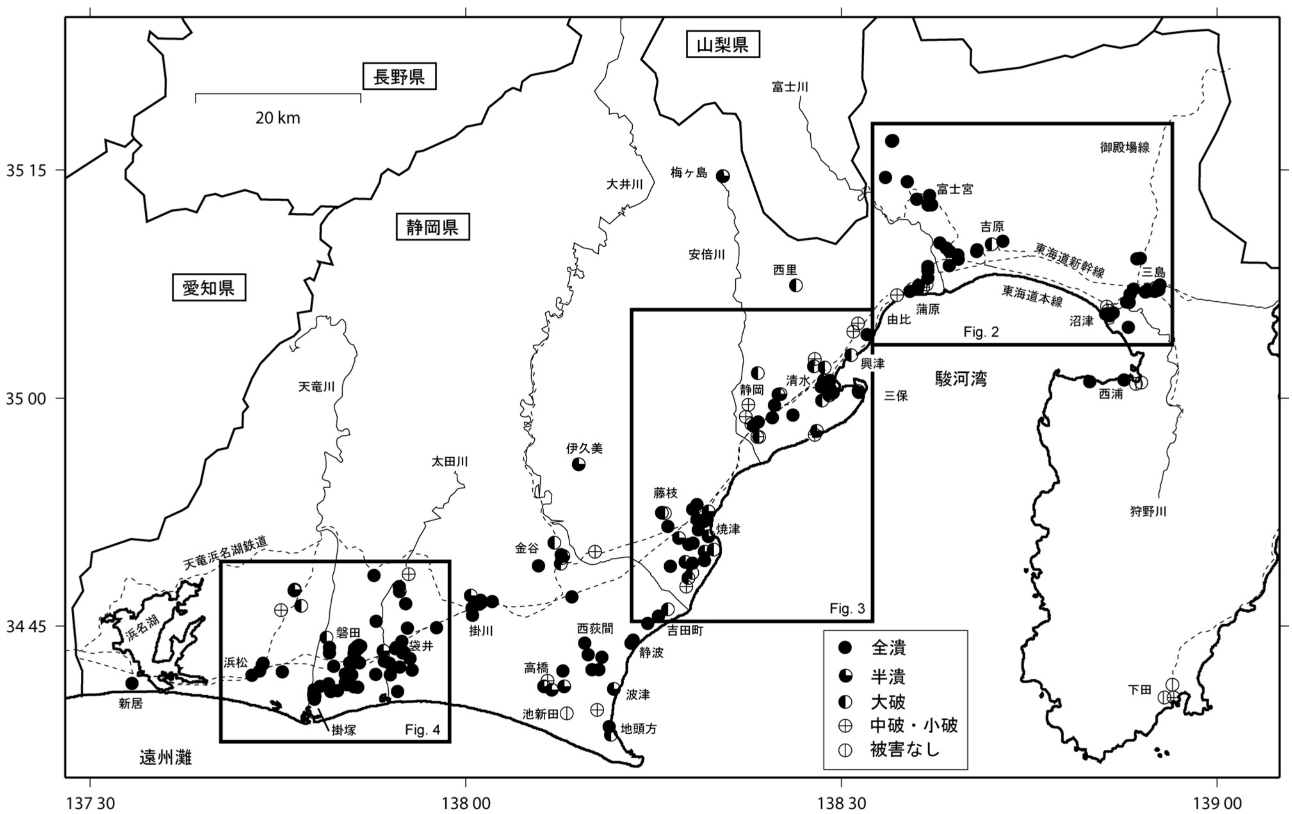

図 1　安政東海地震(1854)による静岡県内の寺院被害図

Fig.1 Distribution of the damaged temples in Shizuoka prefecture due to the 1854 Ansei-Tokai earthquake. The symbols, ●, ◕, ◐, ⊕, and ⦶ mean completely collapsed, partially collapsed, severely damaged, slightly damaged, and no damaged, respectively.

その集落での一般家屋の倒潰率に比べ平均的に15%程度大きいことを示す図を提示している（原著では「壊」の文字が用いられている）. すなわち，社寺の建物のほうが住宅家屋よりも地震強度が弱いことを意味している.

そこで，われわれはこの宇佐美ら（1994）の基準を，腰原(2003)を考慮した形に修正し震度を評価した. つまり，上記の被害率を 15%上乗せし，先述の寺院倒潰率 d が 85%以上は震度 7 とし以下，55～85%，30～55%，16.5～30%および 16.5%以下をそれぞれ震度 6～7，震度 6，震度 5～6，震度 5 以下という基準を提案した. この基準により求められた震度分布図が図 2(b)～図 4(b)である. つぎの§3 で，これらの図を細かく見ていくことにしよう.

§3. 安政東海地震(1854)による静岡県内の寺院被害状況ならびに寺院被害から見積もった震度分布

本研究によって明らかになった静岡県内の寺院被害分布図（図 1）を見てみよう. これをみてまず目に付くことは，全潰した寺院の集中する場所は，静岡県全体を通じて 6 箇所であることである. すなわち，東から①三島・沼津地域，②吉原・富士・蒲原地域，③清水・静岡地域，④焼津地域，⑤牧ノ原台地地域，および⑥天竜川東岸地域の 6 箇所である. 以下，これら 6 地域についてその詳細を見ていこう.

3.1 三島・沼津地域

図 2(a)を見てみよう. 沼津・三島の両宿場に集中する全潰寺院はさらに 4 つの小グループに分けることができる. すなわち西から順に沼津・大岡・南一色（長泉町）・三島の 4 グループである.

沼津海岸部の寺院は，狩野川と千本松原を乗せる海岸砂丘との間に挟まれた狭い平野部に位置する. このため，洪水ごとに狩野川を流下してきた大量の水が海岸砂丘によって一時的に行く手をはばまれ，洪水の滞留をしばしば経験する平野部にあたっている. このことがこの場所に軟弱な地盤が形成され，この一群の被害の大きな寺院群が出現したと推定される. また，同じく被害が大きかった大岡周辺の寺院は，黄瀬川と狩野川の合流点付近に位置し，沖積層の厚い氾濫原上に位置するため，このような集中した被害を生じたものと考えられる.

なお，特筆すべきこととして，沼津宿から原宿の間には，寺院の地震被害がまったく出なかった

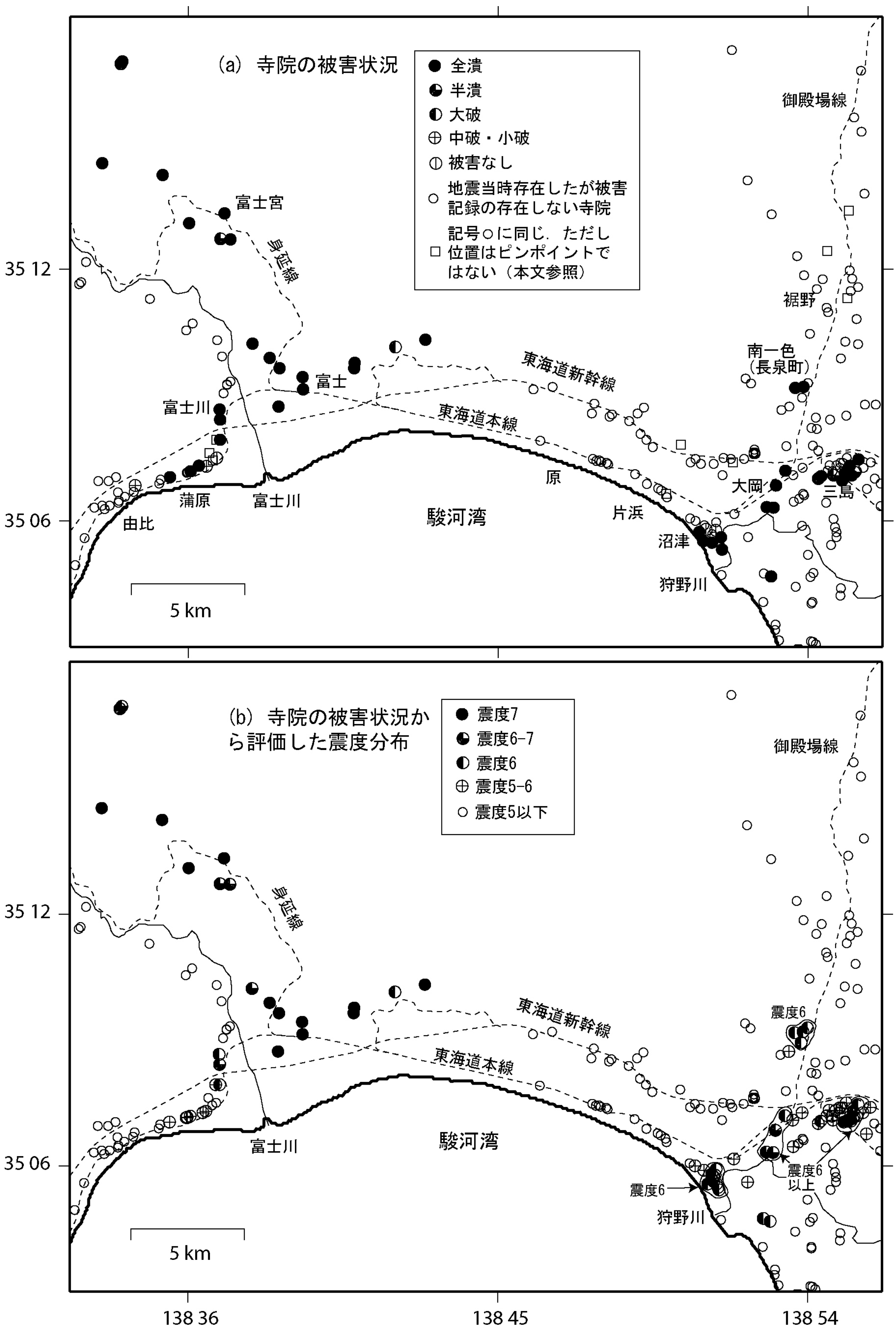

図 2 (a) 安政東海地震(1854)の静岡県三島から由比にかけての寺院被害拡大図 (b) 寺院倒潰率から求めた震度分布図

Fig2.(a) Detailed distribution of the damaged temples from Mishima to Yui in eastern part of Shizuoka prefecture due to the 1854 Ansei-Tokai earthquake. The symbols ○ mean the temples that existed at the 1854 Anset-Tokai earthquake that have no records of damage. The symbols □ mean the same as ○ but the positions are inaccuracy. The other symbols are the same as Fig.1. (b) Distribution of the seismic intensity estimated by the ratio of damaged temples to the total in the area within the 2-kilometer circle area around it . The symbols, ●, ◕, ◐, ⊕, and ⦶ mean the seismic intensities as 7, 6-7, 6, 5-6, and less than 5 in JMA scale, respectively.

場所が存在する．この地域には海岸砂丘の上に沿って東海道が通っている．また，その北側に東海道に平行して東西に愛鷹山の山裾を連ねる現在の県道 22 号線（三島富士線）が走っている．この地域の寺院はこの両方の道筋に沿って存在しており，いずれもほとんど被害がなかったものと推定される．海岸砂丘の上には，東海道・原の宿場があり，ここでは古文書によっても被害が少なく，地震後も宿泊が可能という記録が残っている（たとえば武者(1951)の p.129 にある『続地震雑纂四』中の『十一月十三日，井村傳太夫，宮七里渉船中に而認候書状』）．この海岸砂丘は，富士川によって運び出されてきた大きな礫を大量に含んだ層から形成されているため，砂丘上では地震時の震度が小さく表われたものと推定できよう．

これらの寺院被害状況から震度を見積もったものが図 2(b)である．この図より，沼津・長泉町南一色周辺で震度 6 の揺れ，大岡・三島地区で震度 6 以上の揺れであったことがわかる．なお，寺院被害がなかった沼津より西から原にかけては，震度 5 以下と判定された．なお，この震度判定にさいして必要だった寺院の全数調査は，大正六年（1917）に発行された『静岡県駿東郡誌』の復刻版（長倉書店，1972）および大正七年(1918)に発行された『静岡県田方郡誌』の復刻版（長倉書店，1972）を用いた．

ところで，付表には図を補う意味で，2.3 の手法で評価された各寺の位置での震度が載せてある．これを見ると，沼津市幸町の永明寺（ようめいじ）や沼津市大門町の正見寺（しょうけんじ，現在は沼津市下香貫に位置するが昭和 36 年以前は沼津市大門町にあった）では，倒潰ポイントが 0.0 であるにもかかわらず震度が 6 と評価される，一種の「不一致」が確認できる．この永明寺と正見寺との距離は 150m 程度であり，両寺から 100m 程度離れたところには，倒潰ポイントが 1.0 であった大聖寺および真楽寺が存在する．さらに永明寺と正見寺から 450m 程度離れたところには同じく倒潰ポイントが 1.0 であった長谷寺と西光寺が存在する．

さて，この倒潰ポイントと震度判定の「不一致」には次の 2 種類の原因が考えられる．一つは，450mの距離の中に倒潰ポイントが 1.0 の寺院が 4 寺あるにもかかわらず 2 寺院は文字通りに「無難」だったのかという，史料精度の問題である．『東海地方地震津波史料（Ⅰ・下巻）』（都司，1979）の『天保八年より安政五年迄・下石田村名主伴右衛門記録』には，「正見寺永明寺弐ヶ寺無難」の記述があるのみである．もう一つの原因は，2.3 で説明した震度計算手法において，r_0の値（2km）がこの倒潰寺院が密集する地域では大きすぎた，ということが挙げられる．r_0は小さいほど自分の寺の情報が反映され，大きくなるにつれ周りの寺の情報が加味されてくるからである．倒潰ポイントと震度判定の「不一致」がこの後者の原因によるものが大きいのであるならば，寺院密度に応じてr_0の値を変えるということが「不一致」を緩和する一つの手法かもしれない．なお，被害がなかったとして扱った全数調査により判明した寺院に一部見られるこの「不一致」も上記と同様のことが言えるであろう．

3.2 吉原・富士・蒲原地域

富士川下流域に位置する吉原・富士・蒲原地域は，岩淵地震山および松岡地震山を生じた地域であって，地震を起こした富士川断層による段差の表われた地域である．震源断層面にごく近い場所であったために，図 2(a)にあるように集中的に地震による倒潰を生じたものと理解することができる．

また，蒲原で多くの寺院が被害にあっているのに対して，由比では寺院被害が少ないことがわかる．このことは寺院被害によってだけではなく，古文書記録からも裏付けられる．すなわち，蒲原宿では地震被害が大きかったがその西隣の由比では被害が少なかったことが，各種の古文書によって知られている（たとえば『新収日本地震史料第五巻別巻五ノ一』の p.800 にある『袖日記』や,『新収日本地震史料補遺別巻』の p.411 にある『中山正彌家文書』）．

なお，原以西富士川（河川）以東の地域は，『静岡県富士郡誌』発行当時（大正三年，1914）富士郡であった．『静岡県富士郡誌』は当時の寺院の数のみが各村でまとめられているにとどまり，各寺院の位置が正確に書かれていない史料であった．したがって，寺院の全数は判明するものの位置調査ができていないため，この旧富士郡の地域（原以西富士川（河川）以東）についての震度評価は 2.3 で説明した手法によって行われていない．図 2(b)にある震度は被害寺院の倒潰ポイントのみで判断した震度であり，参考程度としていただきたい．付表に載せたこの地域の寺院の震度には，これを区別する目的で震度に*を付けた．しかし，この富士川河口部では，図 2(a)から震度 6 以上はあったと言っても過言ではなかろう．

いっぽう，由比や蒲原，富士川地域については，旧庵原郡に所属していたため，寺院の全数を大正五年(1916)発行の『静岡県庵原郡誌』（安川書店復刻，1971）によって調査することができた．これを用いて震度判定を行うと，富士川周辺で震度 6 以上，蒲原周辺で震度 5-6 程度，由比周辺で震度 5 以下の揺れであったと判定された．

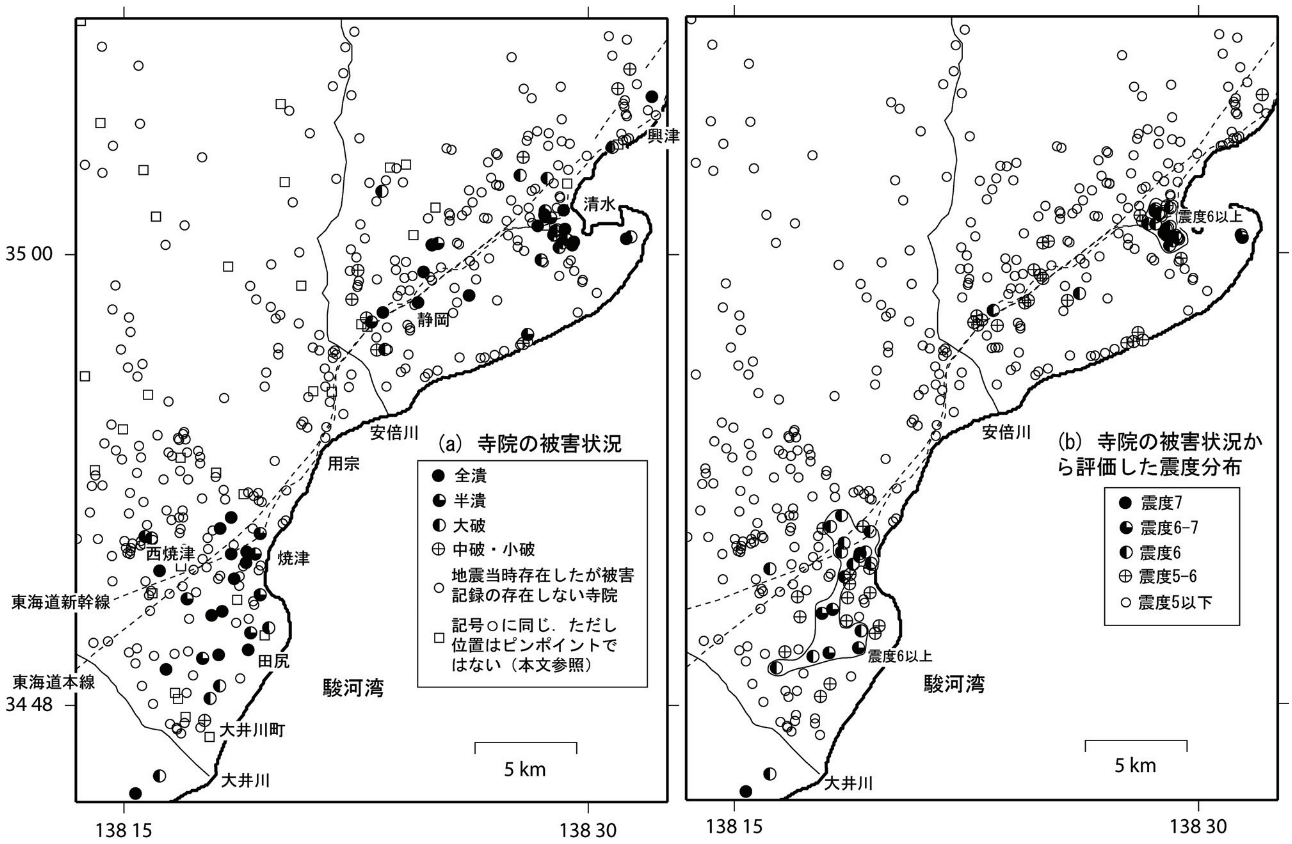

図 3 (a) 安政東海地震(1854)の静岡県興津から大井川町にかけての寺院被害拡大図 **(b)** 寺院倒潰率から求めた震度分布図

Fig3.(a) Detailed distribution of the damaged temples from Okitsu to Ooigawa-machi in mid part of Shizuoka prefecture due to the 1854 Ansei-Tokai earthquake. The symbols are the same as Fig.2(a). (b) Distribution of the seismic intensity estimated by the ratio of damaged temples to the total in the area within the 2-kilometer circle area around it . The symbols are the same as Fig.2(b).

3.3 興津・清水・静岡・焼津地域

図 3(a)を見ると，清水駅周辺では約 2km 四方という狭い範囲に寺院被害が集中していることがわかる．また，三保半島および静岡市駿河区海岸部である安居地区においても地震動による寺院被害が存在する．これらの海岸は津波による流失被害も生じているが，ここでとりあげた三保や安居の寺院被害は，明白に地震動によるものである．静岡駅周辺では重い寺院被害は認められるものの，その空間的密度が清水駅周辺に比べ薄くなっていることがわかる．さらに目を西に向けると，安倍川西岸の用宗の平野部ではまったく寺院被害が存在しないことがわかる．これは安倍川下流域東岸で寺院被害が生じているのに対して顕著な違いである．最後に焼津地域に目を向けてみよう．ここでは，焼津駅南側を中心に約 2km の狭い範囲で被害寺院が集中していることがわかる．また，それより南部に位置する西焼津駅と田尻集落に挟まれた地域でも，被害寺院が集中していることがわかる．

つぎに，寺院全潰率から求められた震度分布図（図 3(b)）を見てみよう．これによると，被害が狭い範囲に集中した清水駅周辺や焼津駅周辺では震度 6 以上と判定された．また，西焼津駅と田尻集落に挟まれた地域に置いても震度 6 以上と判定された．これに対し，寺院被害が比較的広範囲に分布した静岡駅周辺では震度 5-6 の揺れと見積もられ，興津では震度 5-6 であったところが見受けられるものの，ほとんどが震度 5 以下と推定された．さらに，安倍川河口部西岸の用宗では震度 5 以下の揺れであったと推定された．

なお，興津・清水・静岡・焼津地域の震度を寺院倒潰率から評価するのに必要だった寺院の全数調査は,『静岡県庵原郡誌』(安川書店復刻, 1971)，大正三年(1914)に発行された『静岡県安倍郡誌』（安川書店復刻，1972），および大正五年（1916）に発行された『静岡県志太郡誌』（名著出版復刻，1971）を参考にした．

3.4 牧ノ原台地地域

図 1 にある波津や静波，地頭方といった牧ノ原市の海岸線およびその背後の牧ノ原台地上では，一般的に寺院被害が比較的大きく，しかも一点集中はしておらず広がりをもって分布している．こ

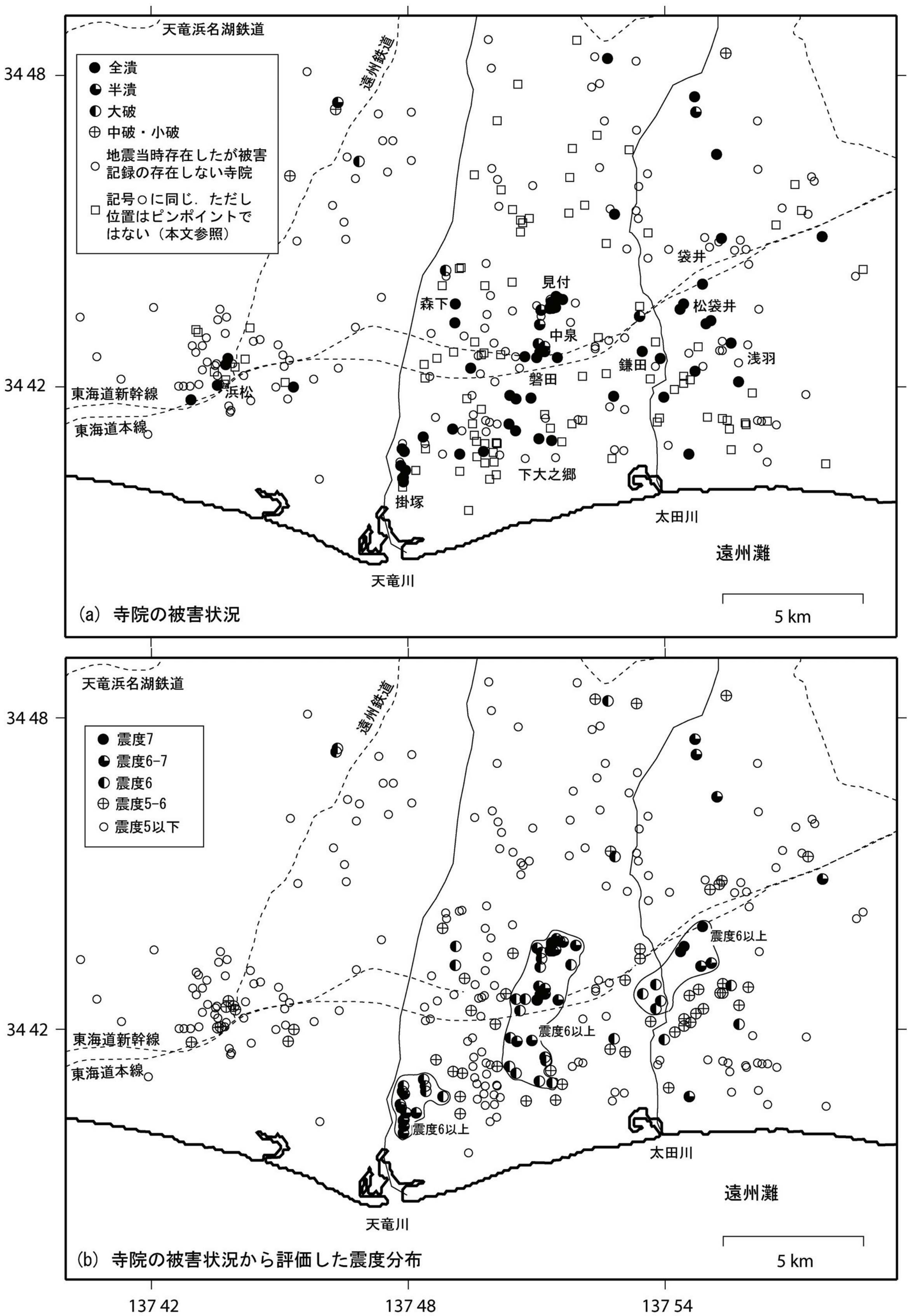

図 4 (a) 安政東海地震(1854)の静岡県天竜川流域の寺院被害拡大図 (b) 寺院倒潰率から求めた震度分布図

Fig4.(a) Detailed distribution of the damaged temples around the Tenryu river in western part of Shizuoka prefecture due to the 1854 Ansei-Tokai earthquake. The symbols are the same as Fig.2(a). (b) Distribution of the seismic intensity estimated by the ratio of damaged temples to the total in the area within the 2-kilometer circle area around it . The symbols are the same as Fig.2(b).

の地域では集落は台地の上に位置しており，地盤的には堅牢であって地震の揺れは小さく表れると予想される地域であるが，全体が安政東海地震(1854)の断層すべり面の直上にあったため，このように比較的被害の強い領域が広がって分布していると推定される．

3.5 天竜川流域地域

図4は天竜川を中心にして，その流域の寺院被害状況および震度分布が示された図である．寺院の被害状況（図4(a)）を見ると，天竜川河口付近東岸の掛塚で全潰被害をうけた寺院の集合が見受けられる．ここは，天竜川河口部の後背湿地にあたる地域なため強い揺れになったことが推定される．また，磐田駅を中心とする南北にのびた地域，すなわち，見付・中泉・磐田駅・下大之郷を含む地域でも集中的に被害寺院が存在したことがわかる．さらに，袋井や松袋井，浅羽，鎌田および浜松駅周辺で被害を受けた寺院の存在が認められる．

つぎに，この寺院被害状況から評価された震度分布図（図4(b)）を見てみよう．これによると掛塚や磐田駅周辺（見付・中泉・磐田駅・下大之郷）および鎌田から松袋井にかけての地域で震度6以上の揺れであったと判定された．この，天竜川東岸の地域は大正年間においては旧磐田郡に属していたことから，震度判定に必要になった寺院の全数調査には大正十年(1921)に発行された『静岡県磐田郡誌』（千秋社復刻，1997）を用いた．

いっぽう，天竜川西側の浜松市については大正十五年（1926）に発行された『静岡県浜名郡誌』（静岡県浜名郡役所，1926）に寺院の情報が書かれており，「大正十四年度現在郡下の寺院は，曹洞宗一一八，臨済宗一三八，浄土宗一三，真言宗七，時宗六，日蓮宗二六，黄檗宗三，眞宗二，合計三一二寺あり．」とある．しかしながら，312の寺院すべての名前及び位置情報が書いてあるわけではなく，「今，寺院の主なるものを挙ぐれば左の如し．」と始まってわずか47の寺院の紹介がされているだけである．したがって，『静岡県浜名郡誌』(1926)からは浜名郡下の寺院全数を調査することができなかった．図4(b)の天竜川よりも西側部分は，この47の寺院を全数として震度判定を行った結果であって，2.3で説明した手法によって得られた結果ではない．天竜川より西側部分は参考程度としてご覧いただきたい．

§4. まとめ

本研究では，安政東海地震(1854)による静岡県内の寺院の被害記事に注目し，その被害の状況に応じて各寺に倒潰ポイントを与え，この地震の寺院被害分布図を作成した．また，大正年間に発行された静岡県内の各郡誌から地震当時存在した寺院を全数調査した．そしてこのうち被害記事のない寺院に関しては被害が無かった寺と判断して，被害記事のあった寺とともに震度を推定した．その結果，寺院の被害状況から判断する限り，狩野川下流部，富士川下流部，静岡市清水区周辺部，焼津市中央部，磐田市周辺部，および天竜川東岸下流部において震度6以上の揺れであったことがわかった．また，原や由比，および安倍川と焼津の間にある用宗地区では震度5以下の揺れであったことも特筆に値することである．

謝辞

本研究で静岡県内の寺院全数調査を行うにあたり，静岡市駿河区谷田の静岡県立中央図書館ならびに静岡市葵区追手町の静岡県歴史文化情報センターからは，多大なご協力をいただきました．また，匿名の査読者のかたならびに編集者の林豊氏からは貴重なコメントをいただきました．記して感謝いたします．

文献

富士郡役所（編）, 1914, 富士郡誌, 222pp.

浜名郡役所（編）, 1926, 静岡県浜名郡誌, 650pp.

平凡社, 2000, 静岡県の地名, 日本歴史地名大系, 22, 1387 pp.

飯田汲事（編）, 1980, 四大地震（明応・宝永・安政東海・東南海）の調査と比較, 東海地方尾地震被害調査研究グループ

磐田郡教育会（編）, 1921, 静岡県精髄磐田郡誌（初版は静岡県磐田郡誌），千秋社（1997）, 1150pp.

角川書店, 1982, 角川日本地名大辞典, 静岡県, 22, 1590pp.

腰原幹雄，藤田香織，大橋好光，坂本功, 2003, 1923年関東地震による鎌倉の社寺の被害, 日本建築学会構造系論文集, 573, 129-135.

武者金吉, 1951, 日本地震史料, 毎日新聞社, 350 pp.

志太郡役所（編）, 1916, 静岡県志太郡誌, 上, 名著出版復刻（1971）, 793pp.

静岡県仏教会, 1965, 静岡県仏教会名鑑, 383pp.

静岡県総務部学事文書課, 1988, 静岡県宗教法人名簿, 304 pp.

静岡県安倍郡教育会（編）, 1914, 静岡県安倍郡誌,

安川書店復刻（1972）, 1014pp.
静岡県庵原郡教育会（編）, 1916, 静岡県庵原郡誌, 安川書店復刻（1971）, 564pp.
静岡県駿東郡役所(編), 1917, 静岡県駿東郡誌, 長倉書店復刻（1972）, 1289pp.
静岡県田方郡役所(編), 1918, 静岡県田方郡誌, 長倉書店復刻（1972）, 880pp.
東京大学地震研究所（編）, 1987, 新収日本地震史料, 5, 別巻 5-1, 1438 pp.
東京大学地震研究所（編）, 1989, 新収日本地震史料, 補遺, 別巻, 992 pp.
東京大学地震研究所（編）, 1994, 新収日本地震史料, 続補遺, 別巻, 1228 pp.
都司嘉宣（編）, 1979, 東海地方地震津波史料（Ｉ・下巻）, 防災科学技術研究資料, 36, 科学技術庁国立防災科学技術センター, 857 pp.
Tsuji, Y., 1987, Victims of the 1707 and 1854 Tokai-Nankai Earthquakes-Tsunamis listed on Necrologies of Temples, Proc. Intern. Tsunami Symp. 1987, Vancouver, Pacific Marine Enviro. Lab., NOAA, 73-102.
都司嘉宣, 1987, 寺院建築物の被害記事でみる安政(1854)東海地震, 月刊地球, 9-2, 106-109.
宇佐美龍夫, 1979, 安政東海地震の震度分布, 地震予知連絡会会報, 22, 216-224.
宇佐美龍夫, 渡辺健, 西村功, 1994, わが国の歴史地震の震度分布・等震度線図について, 歴史地震, 10, 63-75.
宇佐美龍夫, 1996, 新編　日本被害地震総覧, 増補改訂版 416-1995, 東京大学出版会, 493pp.
宇佐美龍夫（編）, 1999, 日本の歴史地震史料, 拾遺, 別巻, 1045 pp.
宇佐美龍夫（編）, 2002, 日本の歴史地震史料, 拾遺, 2, 583 pp.
宇佐美龍夫（編）, 2005, 日本の歴史地震史料, 拾遺, 3, 814 pp.

付表 安政東海地震(1854)による静岡県内の寺院被害記事．位置情報は日本測地系 2000 で表している．また評価震度の欄で震度に*が記されている地点は，寺院の全数を用いないで震度計算を行った地点である．したがって，この*がついた震度は参考程度としていただきたい．

現住所	寺名	東経			北緯			倒潰ポイン	評価震度	被害記事	出典	史料集名
		度	分	秒	度	分	秒					
浜名郡新居町浜名1126	教恩寺	137	33	21	34	41	14	1.0	6～7*	たばこ弐ふく程呑間本堂手玉の如くに成南の方へ倒候	静岡県新居町教恩寺過去帳	5-1142
浜松市東伊場2-20-1	大厳寺	137	42	56	34	41	45	1.0	5～6*	震災の為諸堂倒潰す。其の後漸次本堂庫裡等再建す。	浜松市史	36～713
浜松市成子町	法林寺	137	43	33	34	42	2	1.0	5～6*	嘉永七年十一月震災に罹り悉く倒潰。其の後万延元年假本堂庫裡等を再建す	浜松市史	36～713
浜松市肴町	大安寺	137	43	45	34	42	26	1.0	5～6*	安政元年震災に罹り倒潰、安政五年再建す	浜松市史	36～713
浜松市池町	芳蘇寺	137	43	48	34	42	33	1.0	5～6*	安政元年震災、本堂倒潰。其の以後庫裡を以て本堂に兼用せしが、明治中本堂再建す。	浜松市史	36～713
浜松市頭陀寺町	頭陀寺	137	45	20	34	41	60	1.0	5～6*	円成以下東光に至る四ヶ院(円成院、安狼院、成就院、東光院か)は嘉永七年震災に罹り院宇悉く潰敗し以来唯寺名のみ存す。	浜名郡芳川村誌	36～768
磐田市掛塚	西光寺	137	47	50	34	40	29	1.0	6～7	安政元年十一月四日、震災の為め堂宇倒壊。翌二年之を重修す。	磐田郡誌	36-658
磐田市掛塚	香集寺	137	47	52	34	40	48	1.0	6～7	安政元年、震災のために堂宇倒壊す。今存する所のものは、其の後の経営に成る。	磐田郡誌	36-660
磐田市掛塚	満福寺	137	47	53	34	40	14	1.0	6～7	安政元年の大地震のさいも倒壊し、同四年に再建した。(万福寺とは異なる寺)	ふるさと竜洋	36-675
磐田市掛塚	国清寺	137	47	54	34	40	10	1.0	6～7	安政元年一一月四日震災のため堂宇倒壊、現在の御堂は其の後造営したものである。	ふるさと竜洋	36-675
磐田市掛塚	万福寺	137	47	54	34	40	15	1.0	6～7	安政元年の地震で倒壊したが同年に再建した。(満福寺とは異なる寺)	ふるさと竜洋	36-674
磐田市川袋	潜竜寺	137	47	55	34	40	45	1.0	6～7	安政の地震で倒壊した為仮堂を建立し、現在の本堂は大正六年三月の建立という。	ふるさと竜洋	36-674
磐田市白羽	竜泉寺	137	47	57	34	40	23	1.0	6～7	安政元年震災によって本堂倒壊せり。今存するものは其の後の経営に成る。	磐田郡誌	36-660
磐田市豊岡	守増寺	137	48	22	34	41	2	1.0	6	安政元年一一月四日震災により本堂倒壊	ふるさと竜洋	36-675
磐田市平間425	願成寺	137	49	3	34	41	11	1.0	5～6	安政元年一二月二三日震災によりのこらず破壊され、同五年洞寿覚仙という人が現在の本堂を再建。	ふるさと竜洋	36-674
磐田市森下	興徳寺	137	49	6	34	43	14	1.0	6	安政元年十一月四日震災のため諸堂が倒れて、その年より文久三年まで仮本堂	ふるさと豊田	36-331
磐田市小立野241	林昌寺	137	49	7	34	43	36	1.0	6	本堂は安政元年の震災にあい傾倒した。後明治十年二月二十日仮本堂を建立した。	ふるさと豊田	36-331
磐田市岡	聖寿寺	137	49	13	34	40	42	1.0	5～6	安政元年一一月四日震災によって倒壊し現在の本堂は其の後建立したものである。	ふるさと竜洋	36-675
磐田市下本郷	養福寺	137	49	28	34	42	22	1.0	5～6	然るに三度安政元年十一月四日の大震災に罹り、遂に本堂庫裡が倒壊した。そこで誓願を発し、千日間見付宿中泉村をまわって浄財を集め、修繕を竣功させた。	ふるさと豊田	36-332
磐田市海老島197	心月寺	137	49	46	34	40	45	1.0	～5	嘉永七年一一月四日震災により倒潰し現在の本堂は天保九年再建されたものである。	ふるさと竜洋	36-675
磐田市千手堂637	千手寺	137	50	22	34	41	17	1.0	6	安政元年、震災に罹り諸堂・伽藍倒壊せしが、其の後檀信の喜捨に依て本堂庫裡其の他の仮建築をなせり。	磐田郡誌	36-659
磐田市豊島	宝珠寺	137	50	23	34	41	50	1.0	6	安政元年十一月四日震災のため諸堂倒壊せり、翌二年、仮建築をなせしが、今損する所の本堂・庫裡・玄関・物置の如きは、明治三十六年二月七日許可を得て建築したるものなり	磐田郡誌	36-659
磐田市万正寺	万正寺	137	50	31	34	41	9	1.0	6	安政元年十一月四日、震災に罹りて堂宇伽藍悉く倒壊せしに依り翌二年仮堂を建てたり	磐田郡誌	36-659
磐田市豊島905	天正寺	137	50	32	34	41	46	1.0	6～7	安政元年十一月四日、震災に因りて堂宇倒壊せしため、翌年十一月本堂・庫裡などの仮建築をなせり	磐田郡誌	36-659
磐田市中泉石原町1557	泉蔵寺	137	50	44	34	42	35	1.0	6	嘉永七年十一月四日震災ノ際書院鐘楼破潰ス、安政元年住職古山諸堂修覆ス	中泉町誌	36-667
磐田市上岡田	大蔵寺	137	50	53	34	41	47	1.0	6～7	安政元年十一月四日、震災のため堂宇倒壊あり。安政二年関海住職の時に於て本堂・庫裡・鎮守堂、観音堂を仮設したり。	磐田郡誌	36-659
磐田市中泉御殿743	中泉寺	137	51	1	34	42	34	1.0	6～7	安政元年十一月四日の震災に罹りて、本堂其の他の諸堂宇倒壊す。翌二年、住職建国仮本堂、鎮守堂等を重修せり。	磐田郡誌	36-658
磐田市中野	多聞寺	137	51	4	34	40	60	1.0	6	安政元年地震のため堂宇倒壊の災いに罹れり。	磐田郡誌	36-659
磐田市中泉、駅	善導寺	137	51	5	34	42	40	1.0	6～7	皆潰	中泉町誌	36-668
磐田市見付2440	玄妙寺	137	51	21	34	43	38	1.0	6～7	本堂潰	中泉町誌	36-687
磐田市下大之郷	恵日寺	137	51	22	34	40	58	1.0	6	皆潰	静岡県吉田町史(上巻)	続補遺別－602
磐田市見付2735-1	慶岩寺	137	51	23	34	43	31	1.0	6～7	皆潰	中泉町誌	36-687
磐田市見付2749-1	金剛寺	137	51	27	34	43	32	1.0	6～7	皆潰	中泉町誌	36-687
磐田市見付2423	省光寺	137	51	28	34	43	45	1.0	6～7	庚申堂地蔵堂潰	中泉町誌	36-687
磐田市二之宮1262	連福寺	137	51	30	34	42	34	1.0	6～7	嘉永七年十一月四日地震ニ罹り潰破ニ及ブ、安政二年恵山ノ代修造ス。	中泉町誌	36-667
磐田市見付2510-1	大見寺	137	51	32	34	43	42	1.0	6～7	皆潰	中泉町誌	36-687

現住所	寺名	東経			北緯			倒潰ポイン	評価震度	被害記事	出典	史料集名
		度	分	秒	度	分	秒					
磐田市見付1340-1	宣光寺	137	51	37	34	43	41	1.0	6～7	残らず潰れ	中泉町誌	36-687
袋井市川会144-1	宗円寺	137	52	40	34	48	20	1.0	6	安政元年十一月四日の震災に罹り諸堂悉く倒壊焼失せしをもって、旧記の微すべきものなし	磐田郡誌	36-662
磐田市蛭池	寿至寺	137	52	49	34	41	49	1.0	6	安政元年の震災に於て再び倒壊火を失して灰燼となれり。後復た造営す。	磐田郡誌	36-663
磐田市篠原	正林寺	137	52	50	34	45	20	1.0	6	嘉永七年十一月震災にて金堂宇潰倒す、現今の堂宇は文久二年五月造営	向笠村誌	続補遺別-551
磐田市鎌田2546	全久院	137	53	29	34	42	41	1.0	6	安政元年十一月四日、震災のため諸堂倒壊せしに因り、爾後漸次造営	磐田郡誌	36-662
磐田市東脇	冷泉庵	137	53	54	34	42	33	1.0	6	安政元年震災のために堂宇倒壊せしに依り、後年仮堂の建立をなせり。	磐田郡誌	36-663
袋井市富里	松秀寺	137	53	59	34	41	48	1.0	6	宝永四年、安政元年など数回の震災に罹り堂宇倒壊、後安政二年より慶応三年に亘り、当山第二十世祖山忍堂建替をなす。	磐田郡誌	36-660
袋井市松袋井15	松蔵寺	137	54	22	34	43	30	1.0	7	安政元年の震災に罹りて堂宇倒壊せり。今存するものは、万延元年九月、祥雲の代に再建せしものなり。	磐田郡誌	36-662
袋井市新池114	全法寺	137	54	27	34	43	36	1.0	7	安政元年の震災に罹り堂宇倒壊す。今存するものは、当寺第十二世秀栄の時、万延元年八月再建せし所なり。	磐田郡誌	36-662
袋井市湊42	長江庵	137	54	34	34	40	42	1.0	6～7	安政元年の震災に罹り倒壊したるに因り、其の五年仮本堂を建つ。	磐田郡誌	36-664
袋井市春岡130	極楽寺	137	54	42	34	47	36	1.0	6～7	嘉永後の震災に罹り悉く潰壊す。安政四年三月十世智賢代に現今の殿堂を再建す。	宇刈村誌	36-593
袋井市中	用智院	137	54	43	34	42	18	1.0	5～6	安政元年の震災に罹り殿堂倒壊せしを以て、其の二年、第九世覧道の時に於て之を再建す。	磐田郡誌	36-660
袋井市新池465	栄泉寺	137	54	53	34	43	59	1.0	7	安政元年の震災に罹り堂宇倒壊す。今存するものは明治四年十二月、第十三世竜淳の時再建したるものなり。	磐田郡誌	36-662
袋井市諸井514	心宗院	137	54	58	34	43	13	1.0	6～7	安政年度の震災に罹りて倒壊す。	磐田郡誌	36-661
袋井市諸井1056	長昌寺	137	55	5	34	43	17	1.0	6～7	安政元年の地震に因りて倒壊す。越えて其の三年に至り、仮本堂及び庫裡等営造あり。	磐田郡誌	36-661
袋井市袋井186-1	観福寺	137	55	20	34	44	52	1.0	5～6	安政元年の震災に罹り堂宇悉く倒壊せり。慶応三年に至り、八世智道及十一世梅宗の両師私金を以て殿堂を再建す。	磐田郡誌	36-661
袋井市浅羽	円明寺	137	55	33	34	42	51	1.0	6	遠州三弘法霊場由来、嘉永の震災に罹り伽藍大破し安政三年仮本殿を再建し現在に至る	寺院名鑑	36-587
袋井市豊住367	常楽寺	137	55	44	34	42	6	1.0	6	安政元年十一月四日、震災に罹り堂宇倒壊せり。今存するものはその後の経営に係る。	磐田郡誌	36-660
袋井市愛野3079	能光寺	137	55	56	34	44	39	1.0	6～7	安政の震災に罹り殿堂倒壊せしも、元治元年、入寺後法灯の将に絶えとするを継ぎ以て中興の業を成せり。	磐田郡誌	36-661
袋井市愛野2358	明香寺	137	57	41	34	44	54	1.0	6～7	安政元年の震災に罹り堂宇倒壊す。今存するものは其の三年再建せし所に係る。	磐田郡誌	36-661
掛川市中央2-8-1	広楽寺	138	0	30	34	46	11	1.0	7＊	本堂、庫裡とも潰れ庫裡は安政二年に再建し本堂は明治に入ってから再建された。	史料に見る東海大地震	5-1079
掛川市久保2	乗安寺	138	0	33	34	45	43	1.0	7＊	安政元年寅年震災に罹り堂宇崩壊甚だしく其の後漸次修補以て現今に至る。	静岡県小笠郡誌	36-670
掛川市仁藤町5-5	天然寺	138	1	5	34	46	27	1.0	7＊	安政元年寅年十一月震災一山諸堂宇悉く倒潰す。其後本堂庫裡を併せ再建す。	静岡県小笠郡誌	36-670
掛川市仁藤65	神宮寺	138	1	12	34	46	42	1.0	7＊	寺中の建物が倒潰し本堂の再建は大正五年	史料に見る東海大地震	5-1079
掛川市仁藤	真如寺	138	1	14	34	46	32	1.0	7＊	安政元庚寅年の震災に罹り堂宇崩潰し爾来漸次再築	掛川市史	36-594
掛川市仁藤67	正願寺	138	1	14	34	46	40	1.0	7＊	庫裡が全潰、本堂も大破し八年目の文久二年ようやく庫裡を再建本堂も大修繕を加えてほぼ旧状に復した。	史料に見る東海大地震上	5-1079
掛川市成滝120	阿弥陀寺	138	2	7	34	46	38	1.0	7＊	現在の建物は明治二十年頃の再建、安政の地震に倒潰して、東海道より入る門を南に移して旧川崎街道より入る。	掛川市史	36-594
掛川市佐夜鹿291	久延寺	138	5	49	34	48	59	1.0	7＊	安政元年寅年震災に罹り残余の堂宇悉く破壊す。文久年中僅かに堂宇を再建す。	静岡県小笠郡誌	36-670
菊川市高橋497	正林寺	138	7	45	34	42	3	1.0	7＊	庫裡平潰	雄踏町誌資料編九	続補遺別－618
島田市金谷河原	西照寺	138	7	51	34	49	35	1.0	6～7*	安政元年十一月四日又震災のために本堂を除くの外悉く潰倒、同四年本堂を修復し文久二年庫裡を建立す。	金谷誌稿	36-683
牧ノ原市嶋956	西光寺	138	8	29	34	46	55	1.0	7＊	堂塔一時に倒れ	榛原郡榛原町史稿	5-1035
牧ノ原市西萩間	大興寺	138	9	30	34	43	52	1.0	7＊	安政元甲寅年震災に罹り、山門僧堂悉く瓦解し	静岡県榛原郡誌	36-562
牧ノ原市大寄	増光寺	138	9	46	34	43	7	1.0	7＊	嘉永七年十一月四日の地震に遭い堂宇転覆焼亡す、のち安政六年三月殿堂一宇を再建し慶応三年十二月庫裡を再興す	静岡県榛原郡誌	36-563
牧ノ原市菅ヶ谷3333	大聖寺	138	10	6	34	42	8	1.0	7＊	嘉永七年大地震に殿堂転覆、明治三年三月本堂を再建する。	ふるさとシリーズ19・史跡釘ヶ浦浜巡礼地蔵所	続補遺別-580
牧ノ原市黒子	観音寺	138	10	52	34	42	56	1.0	7＊	安政元年の震災に罹りて皆潰し、現在は仮本堂のみ	静岡県榛原郡誌	36-563
牧ノ原市地頭方	孤雲寺	138	11	27	34	38	22	1.0	7＊	寺は東の方から倒れて、全潰。	郷土史話	36-570

現住所	寺名	東経			北緯			倒潰ポイン	評価震度	被害記事	出典	史料集名
		度	分	秒	度	分	秒					
牧ノ原市静波2925	釣学院	138	13	12	34	43	52	1.0	7＊	安政元年十一月四日震災に遭い諸堂ふたたび潰滅。明治五年三月本堂再建。	静岡県榛原郡誌	36-563
牧ノ原市静波2492	明照寺	138	13	22	34	44	5	1.0	7＊	庫裡倒壊	榛原郡相良町波津大沢寺文書	5-1038
牧ノ原市細江1800	掉月庵	138	14	32	34	45	10	1.0	7＊	堂塔一時に倒れ	榛原郡榛原町史稿	5-1035
榛原郡吉田町住吉2147	香海寺	138	15	23	34	45	39	1.0	7＊	安政地震にて潰れる、安政四年四月八日再建	榛原郡吉田町史編纂史料	36-565
藤枝市築地40	円良寺	138	16	9	34	51	35	1.0	6	本堂庫裡観音堂倒潰	円良寺過去帳	5-1021
志太郡大井川町上新田	高福寺	138	16	22	34	48	57	1.0	6	大地震本堂庫裡残らず相潰れ候ニつき（中略）安政二乙卯年六月漸々普請ニ取掛り	高福寺上梁文	5-1030
焼津市中根383	泰善寺	138	17	50	34	50	24	1.0	6～7	安政元年の地震災に罹り堂宇破倒、安政二年三月本堂再築	大富村史	36-323
焼津市三和	興源寺	138	18	4	34	49	21	1.0	6～7	安政元年の地震にて破倒、再建せり	大富村史	36-323
焼津市八摘	林泉寺	138	18	7	34	52	43	1.0	6	嘉永七年十一月四日震災で堂宇破壊し明治十年までは仮屋ですごした。	焼津市誌上	36-544
焼津市祢宜島47	久昌寺	138	18	11	34	50	30	1.0	6～7	安政元年の地震にて堂宇破倒、安政二月（年か？）三月本堂庫裡再建	大富村史	36-323
焼津市塩津182	江月院	138	18	28	34	52	2	1.0	6	全潰	焼津市誌上	5-1016
焼津市八摘1-6	正傳院	138	18	28	34	53	1	1.0	6	安政元年十二月四日震災のため破壊され仮堂が建立された	焼津市誌上	36-544
焼津市西小川3-6～5	永豊寺	138	18	34	34	51	22	1.0	6	庫裡は安政の地震により倒壊したので	小川町誌	36-557
焼津市一色460	成道寺	138	19	1	34	49	29	1.0	6～7	十一月四日、海内未聞の大地震、本堂大破、鐘楼、僧堂、庫裡、方丈、東司右六ヶ所皆潰。翌卯五月、本当（本堂）修覆	久遠山成道寺六百五十年史	36-556
焼津市焼津6-11-14	貞善院	138	19	3	34	51	55	1.0	6	安政元年十二月四日地震の災いにかかり楼閣倒れ庫裡半破	焼津町誌	続補遺別-552
焼津市焼津6-9-16	普門寺	138	19	4	34	51	60	1.0	6	安政元年甲寅大地震にて諸堂悉く大僵す。明治十二年三十世高林入禅本堂を建立ス（後略）。伽藍：安政年間の震災にて僵れたるものは本堂六間七間と伝えられ	焼津町誌	続補遺別-551
静岡市葵区伝馬町	宝泰寺	138	23	22	34	58	28	1.0	6	殿堂が残らず崩壊のため、薪を一駄見舞いに送る	明応七年、宝永四年、嘉永七年地震史料	36-291
静岡市駿河区曲金2	龍泉寺	138	24	30	34	58	44	1.0	5～6	安政年間の震災に遭い諸堂を失う。仮堂にてようやく再建存続	歴史古き郷、静岡豊田の郷	36-332
静岡市葵区沓谷1322	松竜院	138	24	41	34	59	33	1.0	5～6	大地震にて堂宇皆潰破	疎山和尚と子育地蔵縁起	36-526
静岡市駿河区池田	大慈悲院	138	26	9	34	58	55	1.0	6	嘉永七年十一月四日震災のため本堂潰れ明治二十五年二月再建す	安倍郡豊田村誌	36-330
静岡市清水区追分2	東泉寺	138	28	23	35	0	46	1.0	6	安政元年甲寅十一月の震災の為め諸堂潰れ書類什器等悉く失却す。文久二年壬戌年翠応志願によりて本堂及び庫裡を兼て一宇を再建す。	安倍郡入江町誌	36－248
静岡市清水区入江2	慈雲寺	138	28	43	35	1	3	1.0	6	安政元年の大震災に罹り皆全潰となる、ただ山門のみ存す。其の後倒潰の古材を以て平屋一宇を造立し法務の用に宛つ。之を仮本堂と唱へ来れり。	安倍郡入江町誌	36－250
静岡市清水区入江2	東明院	138	28	46	35	1	4	1.0	6	安政元年十一月四日大震災に罹り庫裡潰尽すという。然れども本堂並びに山門幸いに金を得たり。今の本堂是なり。	安倍郡入江町誌	36－250
静岡市清水区江尻東3－6	江浄寺	138	29	5	35	1	12	1.0	6	嘉永七年甲寅年十一月震災ニ罹り諸堂悉く倒壊す。安政三丙辰年住職順誉体愚客殿表門等を再建し	静岡県庵原郡誌	36－155
静岡市清水区上1	専念寺	138	29	5	35	0	42	1.0	6	堂宇は安政の震災に罹り、その後仮堂なりしが明治44年改築竣工せり	安倍郡清水町誌	36－221
静岡市清水区本町	妙生寺	138	29	16	35	0	28	1.0	6	堂宇は安政の震災に罹り皆潰の上焼失せり、今存するのは安政三年十二月に仮堂として建築せるものなり	安倍郡清水町誌	36－221
静岡市清水区清水町	妙慶寺	138	29	22	35	0	22	1.0	6	安政元寅年の大地震の災いに罹り殿堂悉く倒壊す。災後廿七世住職日貫一意興復ヲ謀りしも当寺檀家皆其災を被りしを以て経営頗る勉む己にして先庫裡を再建し本堂と併用す今の庫裡なり。	清水町沿革誌	36－237
静岡市清水区三保	妙福寺	138	31	25	35	0	25	1.0	6～7	妙福寺は本堂がつぶれた。もっとも瓦屋根の家はみなつぶれ、地蔵堂がつぶれた。	明応七年、宝永四年、嘉永七年地震史料	36-286
静岡市清水区興津井上町	東勝寺	138	32	4	35	4	12	1.0	5～6	去寅十一月大地震に而本堂十王堂仁王門に至るまで皆潰に相成り候（中略）信心を以御寄附被成下本堂再建成	清水市興津井上町東勝院文書	5-838
富士郡芝川町鳥並184	代世寺	138	33	31	35	14	32	1.0	7	庫裡居屋潰、客殿小破	静岡県史資料編十二近世四	拾遺二一309
富士宮市精進川2830	千光寺	138	34	6	35	16	57	1.0	6～7*	客殿くり本潰、観音堂本潰、仁王門無難、雪隠本潰	静岡県提供文書	5-807
富士宮市大中里11-1	先照寺	138	35	16	35	14	15	1.0	7＊	皆潰	山田一郎家文書	5-820
静岡市清水区（蒲原町）小金	白泉寺	138	35	29	35	7	3	1.0	5～6	安政の大地震にあい、屋外に飛び出すとともに本堂が倒壊したと口碑を伝えている。	蒲原町史	36－159
富士宮市野中	大泉寺	138	36	2	35	13	6	1.0	7＊	嘉永七年一一月四日大震災の為め本堂庫裡客殿表門鐘楼堂宝蔵七面堂白庵常及び塔中など悉増く倒潰。	富士郡大宮町誌	36-140
静岡市清水区（蒲原町）蒲原3－31	長栄寺	138	36	5	35	7	11	1.0	5～6	安政元甲寅年十一月四日大地震のため本山庫裡共悉く破壊焼失す。	庵原郡蒲原町誌	36－158

現住所	寺名	東経			北緯			倒潰ポイン	評価震度	被害記事	出典	史料集名
		度	分	秒	度	分	秒					
静岡市清水区(蒲原町)蒲原2	東漸寺	138	36	27	35	7	16	1.0	5～6	東漸寺過去帳には、即死者十一名当山諸堂皆潰れ鐘楼のみ残る、とある。	蒲原町史	36－163
庵原郡富士川町中之郷	慈林寺	138	36	55	35	8	40	1.0	6	安政元年の震災にて諸堂宇破損す、同三年再建す	庵原郡富士川村誌	36-134
庵原郡富士川町中之郷	水泉寺	138	36	56	35	7	56	1.0	6	安政元年十一月四日の震災にて本堂破壊す。同六年之を再建す。	庵原郡富士川村誌	36-134
庵原郡富士川町中之郷	宗清寺	138	36	56	35	8	25	1.0	6～7	安政の震災に罹りて堂宇悉く倒壊して復た当年の形跡を止めざりし。	庵原郡富士川村誌	36-134
富士宮市東町	常泉寺	138	37	4	35	13	20	1.0	7＊	本堂安政元年十一月四日大地震あり、倒潰今なし	富士郡大宮町誌	36-140
富士宮市黒田	本光寺	138	37	14	35	12	43	1.0	6～7*	安政元年十一月震災あり堂宇皆倒る。時の住職日現諸檀越と協力して安政五年十月現今の本堂を再建したりという。	富士郡大宮町誌	36-140
富士市松岡	永光寺	138	37	53	35	10	14	1.0	6～7*	安政元年十一月四日震災に罹り、堂宇潰頽	富士郡岩船村誌	36-131
富士市松岡489	瑞林禅寺	138	38	23	35	9	54	1.0	7＊	安政の頃地震にあい堂舎十五宇悉く頽倒する	富士郡岩船村誌	36-131
富士市森島	長慶寺	138	38	38	35	8	44	1.0	7＊	安政元年十一月二日大地震諸堂潰倒仝四年佐野氏本堂建立	富士郡加島村誌	36-131
富士市柚木	蓮盛寺	138	38	40	35	9	39	1.0	7＊	安政元年震災にて本堂頽破	富士郡加島村誌	36-131
富士市本市場	延命寺	138	39	20	35	9	26	1.0	7＊	嘉永七年大地震堂宇潰倒に付き天外和尚之を再建す。	富士郡加島村誌	36-131
富士市上横割	成安寺	138	39	21	35	9	9	1.0	7＊	安政元年十一月四日震災堂宇潰倒	富士郡加島村誌	36-131
富士市中央町3-2-11	称念寺	138	40	50	35	9	39	1.0	7＊	安政元甲寅年十一月地大に震するに会し堂宇悉く転覆し、わずかに小庵を修築して寺墟を存す	富士郡吉原町島田村組合村誌	36-132
富士市中央町3-6-21	大運寺	138	40	51	35	9	47	1.0	7＊	嘉永七年十一月四日地大に震い堂宇壊倒す。	富士郡吉原町島田村組合村誌	36-132
富士市原田	妙禅寺	138	42	54	35	10	20	1.0	7＊	嘉永七年十一月震災にて本堂鐘楼ならびに支院蓮盛坊証行坊など壊倒、爾来仮堂を用い目下本堂再建準備中に属す。	富士郡吉原町島田村組合村誌	36-131
沼津市西浦久料	福聚院	138	49	52	35	1	6	1.0	7	地震につき本堂皆潰但し廊下共潰れ、常住小破損、雪隠、物置小破損	久保田泰蔵家文書	5-685
沼津市千本緑町	長谷寺	138	51	7	35	5	34	1.0	6	安政の地震で倒潰した	沼津市史下	36－112
沼津市幸町	大聖寺	138	51	16	35	5	45	1.0	6	安政の大震に堂宇全く頽破せしを、明治十一年五月に至り新築成り	沼津市誌上	36-111
沼津市末広町	真楽寺	138	51	18	35	5	44	1.0	6	嘉永六年には大地震により堂宇が倒潰した	沼津市誌下	36-111
沼津市本字宮町	西光寺	138	51	22	35	5	34	1.0	6	安政元年、堂宇再建中に大地震に遭い、本堂は倒潰し、難を免れた書院を本堂に代えてきたがこれは昭和二十年の戦災で焼失した。	沼津市誌下	36－112
沼津市下河原町	妙覚寺	138	51	27	35	5	26	1.0	6	安政元年の地震などで堂宇は壊滅しその後仮堂でいたが、明治三十八年に本建築が竣工した。	沼津市誌下	36-112
沼津市西浦木負	永源寺	138	52	36	35	1	13	1.0	7	安政元年の震災にさいして、堂宇はほとんど破壊し、今の堂舎のみが残っているに過ぎない	沼津市誌	36-111
沼津市大岡下石田1092	耕雲寺	138	52	49	35	6	20	1.0	6～7	本堂門口竈部屋残らず潰れ、庫裡大痛み	下石田村名主伴右衛門記録	36-124
沼津市下香貫林ノ下	塩満寺	138	52	56	35	4	41	1.0	6	安政元年の大震災により本堂・庫裡・鐘楼などは壊滅したがその後しだいに復興した。	沼津市誌下	36-112
沼津市大岡	潮音禅寺	138	53	1	35	6	19	1.0	6～7	安政の震災で堂宇が倒潰し同十年になって黙伝和尚がこれを再建した。	沼津市誌下	36-111
沼津市大岡2528	大光寺	138	53	5	35	6	51	1.0	6～7	安政元年の大地震で本堂は倒壊したが明治二十四年三月になって本堂庫裡を再建した。	沼津市誌下	36-112
駿東郡長泉町本宿	雲竜寺	138	53	21	35	7	12	1.0	6	嘉永七年震災により皆滅し、以後安政三年小寺覚源現存の堂宇を再建す。	長泉郷土史	36-130
駿東郡長泉町南一色434	本浄寺	138	53	38	35	9	11	1.0	6	堂宇倒壊し焼失する	ふるさとの歴史年表	続補遺別-547
駿東郡長泉町南一色149	玉泉寺	138	53	53	35	9	12	1.0	6	本堂庫裡・僧堂・山門など、安政元年の震災に悉く倒破焼失し、その後仮本堂を造築す。	長泉郷土誌	36-130
三島市加屋町	林光寺	138	54	24	35	7	4	1.0	6	林光寺境内残らず	三島市資料館文書	5-742
三島市北田町	福聚院	138	55	4	35	7	3	1.0	6	福寿院、柳原薬師堂潰れる	三島市資料館文書	5-742
三島市北田町	誓願寺	138	55	8	35	7	4	1.0	6	安政元年十一月四日孝誉英厳の代震災にて皆潰、再建中安政三年急逝、翌四年英誉観静入寺して完成。	三島市誌下	36-107
三島市大社町	本妙寺	138	55	19	35	7	8	1.0	6	安政の大地震に倒潰。同四年再建。	三島市誌下	36-108
三島市大社町11-15	薬師院	138	55	20	35	7	18	1.0	6	薬師院は半潰	三島市資料館文書	5-742
三島市川原ヶ谷	願成寺	138	55	29	35	7	28	1.0	6	安政元年の大震災に潰倒	三島市誌下	36-108
袋井市久能2915	可睡斎	137	55	13	34	46	29	0.8	6～7	地蔵堂、弁天堂、妙義堂、ならびに吒枳尼堂が嘉永の震災に罹り潰倒	可睡斎史料集第一巻寺誌史料	続補遺別－609
牧ノ原市西山寺50	西山寺	138	10	39	34	42	8	0.8	7＊	半潰、内護摩堂潰家、長屋雪隠共潰家	郷土災害史(7)(10)～(14)	5-1043
浜松市小松	光正寺	137	46	21	34	47	25	0.5	6＊	土蔵半転、薬師堂壁落ち、土塀十間半転	浜北市史通史上巻	拾遺別―535
磐田市中泉254	西願寺	137	51	3	34	42	50	0.5	6～7	半潰	中泉町誌	36-668
磐田市見付3046	国分寺	137	51	5	34	43	12	0.5	6	大破、閻魔堂薬師堂潰	中泉町誌	36-687

現住所	寺名	東経			北緯			倒潰ポイン	評価震度	被害記事	出典	史料集名
		度	分	秒	度	分	秒					
磐田市見付3353-1	西光寺	137	51	7	34	43	29	0.5	6	大破、地蔵堂十王堂観王堂物置潰	中泉町誌	36-687
磐田市中泉516	大乗院	137	51	12	34	42	47	0.5	6～7	半潰	中泉町誌	36-668
磐田市中泉七軒町545	満徳寺	137	51	12	34	42	41	0.5	6～7	半潰	中泉町誌	36-668
磐田市見付一番町2896	見性寺	137	51	19	34	43	31	0.5	6～7	大破、客殿潰る、ただし本堂なし	中泉町誌	36-688
磐田市新貝1556	連城寺	137	53	25	34	43	22	0.5	5～6	安政元年の震災に罹り本堂および開山堂を除く外諸堂ことごとく倒壊す。今存するものは、第二十五世真守普明住職の当時再修せしものなり。	磐田郡誌	36-662
袋井市春岡385	西楽寺	137	54	44	34	47	18	0.5	6～7	本堂破損、鎮守拝殿傾倒、大師堂傾倒、鐘楼堂傾倒	袋井市史史料編二近世	5-1106
掛川市下垂木4111	永江院	138	0	24	34	47	1	0.5	6～7	十一月四日朝五ツ半大地震にて、当山諸堂大破損、その他衆寮・禅堂・経堂・大門・長屋門・雑蔵など皆潰れ	史料に見る東海大地震上	5-1062
菊川市高橋1860	宝積寺	138	6	16	34	41	1	0.5	6＊	法尺寺半潰	雄踏町誌資料編九	続補遺別－618
御前崎市新野2194	高源寺	138	6	53	34	40	48	0.5	6＊	庫裡半潰廊下半潰本堂かたき	松下良伯の手記	36-650
島田市金谷河原2063	専求院	138	7	48	34	49	38	0.5	6～7*	半潰、住居難相成	遠州嶋村山田家文書	5-1027
御前崎市新野	相慈院	138	7	51	34	41	1	0.5	6＊	惣慈院は本堂かたき候のみ	松下良伯の手記	36-650
島田市伊久美	地蔵堂	138	9	1	34	55	41	0.5	6＊	地蔵堂(檜峠)寛仁元年鰺澤に建立、翌二年和合院々主峠に移し祀る、安政年間大地震のため堂宇大破せしにより寄付により再建(位置はピンポイントではない)	伊久身村誌	続補遺別-593
牧ノ原市波津808	大沢寺	138	11	50	34	40	52	0.5	6＊	嘉永七年甲寅十一月四日突如として大鳴動があり、忽ち大地震となった。寺内にいた者は誰も彼も転んだり倒れたりしながら漸くの思いで庭に出たが、その中いくらか揺れが軽くなったと思うと又後大揺れが来て、鐘楼、庫裡の門、蔵子院など悉く倒れて終ったが、ただ本堂だけは倒壊を免れたものの瓦はほとんど崩れ落ちてしまった。本堂内部のご本尊、御祖像、御尊牌は不思議にもたおられもせず安泰に立たせ給う。	榛原郡相良町波津大沢寺文書	5-1038
焼津市大住	円泉寺	138	17	3	34	50	50	0.5	5～6	再建安政二年卯月	大富村史	36-323
焼津市大島	長泉寺	138	17	33	34	49	15	0.5	6	安政に地震にて堂宇大破、安政三年四月本堂再建	大富村史	36-323
焼津市北新田220	光心寺	138	19	6	34	49	56	0.5	6	嘉永七年十一月四日大地震ノ為メ諸堂大破鐘楼堂庚申堂弁天堂ノ三堂破潰シ。	郷土研究資料	36-553
焼津市本町2-4	阿弥陀寺	138	19	15	34	52	2	0.5	6	嘉永七年十一月四日の大地震のため講堂大破鐘楼堂庚申堂弁天堂の三堂破潰し(中略)安政年間の震災に罹り堂宇悉く烏有に帰し、爾後二間仮屋にて経過せしも万延元年一運院日宝現今の伽藍を造作す。	焼津町誌	36-552
焼津市小川3509	信香院	138	19	24	34	50	57	0.5	5～6	安政元年の大震にて堂宇傾斜、再び喜捨を募って修理した。	小川町誌	36-557
焼津市駅北5-10	昌泉院	138	19	24	34	52	35	0.5	6	半潰	焼津市誌上	5-1016
静岡市梅ヶ島	宝珠院	138	20	32	35	14	37	0.5	～5	字名同所(本村)　寺弐ヶ寺　宝珠院屋敷キゆり割下り寺半つぶれニ御座候、蓮久寺之儀は無難に御座候得共、宝珠院屋敷かけ落候得は蓮久寺江落掛り申候場所ニ御座候	森威史氏提供文書	補遺別－462
静岡市常磐町2-13	宝台院	138	22	60	34	58	13	0.5	5～6	宝台院は一の門を焼失し、本堂・御霊屋・御宝蔵ならびに諸門は悉く半潰	静岡市史余録	36-308
静岡市川合144	玄祐寺	138	24	58	35	0	16	0.5	5～6	本堂半潰、七面堂半潰、その外皆潰	静岡市史近世史料二	5-961
静岡市南瀬名町	増福寺	138	25	9	35	0	18	0.5	5～6	庵一ヶ所半潰、その他皆潰	静岡市史近世史料二	5-961
静岡市駿河区根古屋	久能山東照宮	138	28	3	34	57	53	0.5	5～6	本社・拝殿・宝塔などは無事であったが、五重塔・宝蔵・神楽所などは傾き、愛宕山御堂・坊中八個院・石垣・石灯籠などは倒潰して被害が大きかった。	静岡市史余録	36-308
静岡市清水区入江南町	法岸寺	138	28	48	35	0	59	0.5	6	安政元寅年又々震災に罹り本堂のみを残して余は皆潰となる。	安倍郡入江町誌	36－249
静岡市清水区清水町	実相寺	138	29	20	35	0	24	0.5	6	安政元年の大地震に罹り、本堂半潰れ、外建物は悉く崩壊す。当時僅かに本堂を修理し後漸次諸建物建造す。	安倍郡清水町誌	36－236
富士宮市精進川2826	常境寺	138	34	3	35	16	54	0.5	6～7*	客殿くり半崩、外家二軒本潰、つりかね堂半崩	静岡県提供文書	5-807
富士宮市黒田	自証寺	138	36	57	35	12	44	0.5	6～7*	安政元年十一月震災の為厄除堂倒れ、明治十三年之を再建したり。	富士郡大宮町誌	36-140
三島市加屋町	善教寺	138	54	19	35	7	1	0.5	5～6	茅町善教寺本堂半潰れ	三島市資料館文書	5-742
三島市本町	常林寺	138	54	45	35	7	6	0.5	5～6	常林寺は半潰	三島市資料館文書	5-742
三島市大社町7-56	成真寺	138	55	22	35	7	10	0.5	6	成真寺本堂半潰	三島市資料館文書	5-742
浜松市中郡町	大竜寺	137	46	52	34	46	21	0.3	～5*	本堂は間口七間奥行五間の建築物なりしが安政二年大地震のため大破す	浜名郡積志村誌	36-768
磐田市池田	行興寺	137	48	53	34	44	15	0.3	～5	本堂ばかり大損し候而表門夥処潰候	中泉町誌	36-688

現住所	寺名	東経			北緯			倒潰ポイン	評価震度	被害記事	出典	史料集名
		度	分	秒	度	分	秒					
島田市番生寺43-1	番生院	138	7	5	34	50	31	0.3	6＊	本堂右江動きかたき、所々壁ゑみ、くり右江動き大黒柱割れかたぎ、かべ落ち申し候、阿弥陀堂半潰れ	金谷町史資料編二近世	拾遺別一490
島田市金谷2253	長光寺	138	7	35	34	49	8	0.3	6＊	安政元年寅の震災後元治元年十一月、当山十五世日聞代再興す。	寺院名鑑	36-586
島田市金谷159	医王寺	138	7	41	34	49	30	0.3	6＊	壱ヶ所大破	遠江国榛原郡文書	5-1035
牧ノ原市新庄957-2	林昌院	138	11	35	34	37	49	0.3	6＊	当寺客殿、庫裡大損し、門は転び、瓦はくだけ、塀柱折れ候、薬師堂前の家、雪隠は小損す	今日の相良史話	36-568
藤枝市天王町1-4	了善寺	138	15	41	34	52	30	0.3	～5	安政の大地震により大破に及び居たり。明治十一年九月三十一世智範再建して今に至る。	藤枝町誌	36-573
藤枝市本町3	養命寺	138	15	54	34	52	28	0.3	～5	嘉永七甲寅歳十一月四日諸国大地震之節当本堂庫裡諸堂大破ニ相成	養命寺過去帳	5-1019
榛原郡吉田町川尻1602	正雲寺	138	16	9	34	46	7	0.3	6＊	諸堂が大破し、安政五年九月庫裡を再建した。	榛原郡吉田町史稿	5-1036
志太郡大井川町高新田152	正泉寺	138	17	47	34	48	11	0.3	5～6	本堂残らず大破	大井川町史中	続補遺別-575
志太郡大井川町藤守503	大学寺	138	18	6	34	48	31	0.3	5～6	嘉永七寅年十月四日大地震、客殿・庫裡大破損、皆修覆	大井川町史中	続補遺別-578
焼津市田尻北	長久寺	138	19	41	34	50	4	0.3	5～6	嘉永七年十一月の地震に堂宇大破、大正三年再建	久遠山成道寺六百五十年誌	36-557
静岡市葵区有永	聖楽寺	138	23	20	35	1	41	0.3	～5	安政年度の震災にて堂宇大いに破壊せり、慶応元乙丑年観川住持して以来堂宇を修理し	麻機村誌	36-318
静岡市駿河区見瀬	自休寺	138	23	26	34	57	29	0.3	～5	嘉永七年震災に罹りしを以て慶応二年堂宇を再建す	安倍郡大里村誌	36-321
静岡市清水区西里	起雲寺	138	26	23	35	7	27	0.3	～5	この度御本山様江奉申上候次第は当月四日大地震にて末山起雲寺至而及大破庫裡客殿戸壁等は及び申さず、廣庭辺り大門通迄崩れ落ち近辺歩行難に相	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-549
静岡市清水区下野町	崇壽寺	138	27	49	35	2	7	0.3	～5	本堂庫裡　大破	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区北矢部854	東海寺	138	28	29	34	59	52	0.3	～5	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区元城町	宝久寺	138	28	37	35	1	10	0.3	6	安政元年の大震災に罹りぬ、その後第十四世白崖和尚尚亦再建す、現今の本堂および庫裡これなり	安倍郡入江町誌	36－250
静岡市清水区八坂東2	眞福寺	138	28	41	35	2	2	0.3	～5	本堂庫裡大破ならびに門皆潰	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区下清水町11	光明寺	138	28	54	35	0	32	0.3	6	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区上清水町3	慶雲寺	138	28	57	35	0	38	0.3	6	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区上清水町5－7	禅叢寺	138	28	60	35	0	40	0.3	6	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候（続補遺別巻550ページには、禅口寺と書いてあるが、禅叢寺と判断した。）	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区北矢部町8	新定院	138	29	4	35	0	12	0.3	6	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区南岡町3-8	梅陰寺	138	29	11	35	0	19	0.3	6	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区清水町	成就院	138	29	18	35	0	25	0.3	6	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市清水区興津清見寺町	清見寺	138	30	47	35	2	52	0.3	～5	五ツ時大地震が起こった、山内の高塀が残らず崩壊し、総門がうち折れる。門前は格別の被害はない、仏殿・塀が大破し、所々に破損がでた。	明応七年、宝永四年、嘉永七年地震史料	36-291
静岡市清水区三保	釣江寺	138	31	23	35	0	29	0.3	6～7	四日四つ時大地震に付会合残らず大損仕り候	巨竈山清見興国禅寺の歴史	36－177
富士市宇東川西町	清岩寺	138	42	2	35	10	9	0.3	6＊	安政元年堂宇震災に罹り大破す	原田村・富士郡町村誌	36-132
浜松市小松	紹隆寺	137	46	19	34	47	21	0.2	6＊	門転、土蔵壁落ち	浜北市史通史上巻	拾遺別一536
磐田市見付2431-1	慈恩寺	137	51	21	34	43	40	0.2	6～7	大破	中泉町誌	36-687
周智郡森町飯田3052	崇信寺	137	55	26	34	48	26	0.2	5～6*	本堂残り庫裡方丈破損、物置残り、土蔵潰れ禅堂潰れ	森町史資料編三近世	拾遺二一358
菊川市高橋1588	竜泉寺	138	6	32	34	41	23	0.2	6＊	痛み	雄踏町誌資料編九	続補遺別－618
島田市本通1	正覚寺	138	10	19	34	49	55	0.2	～5*	本堂を大破され	島田六合大長大津郷土史稿5	5-1022
御前崎市比木1580	清岩院	138	10	30	34	39	29	0.2	5～6*	中痛	浜岡町史料1	5-1051
静岡市葵区七間町	雷電寺	138	22	50	34	58	19	0.2	5～6	地震につき雷電寺土蔵大破、時の鐘堂同断、日番人小屋潰れ、溜小屋潰	静岡市史編纂史料131	36-442

現住所	寺名	東経			北緯			倒潰ポイン	評価震度	被害記事	出典	史料集名
		度	分	秒	度	分	秒					
静岡市駿河区中原	玉泉寺	138	23	19	34	57	28	0.2	～5	玉泉寺大破	嘉永七年寅年十一月四日安政大地震静岡市附近関係記録	5-981
静岡市清水区山原	長福寺	138	27	54	35	2	36	0.2	～5	本堂　破損	清水市史編纂委員会提供文書	続補遺別-550
静岡市駿河区安居	照久寺	138	27	54	34	57	38	0.2	5～6	安政二甲寅年震災のとき堂宇破損	安倍郡久能村誌	36-326
静岡市清水区谷津町1-5	蓮性寺	138	30	58	35	4	25	0.2	～5	客殿破損、宝塔二本ころび、墓所残らずころび、石垣前通り五、六間崩落	明応七年、宝永四年、嘉永七年地震史料	36-290
静岡市清水区（蒲原町）神沢	海宝寺	138	34	28	35	6	48	0.2	～5	海宝寺氏神社大破	蒲原町史	36－161
浜松市有玉北町653	竜秀院	137	45	15	34	46	4	0.1	～5*	安政の大地震に遭うも崩壊を免れ	寺院名鑑	36-587
志太郡大井川町利右衛門855	高岳寺	138	17	37	34	47	36	0.1	～5	庫裡一箇所破落	大井川町史中	続補遺別-575
静岡市葵区安西1-103	然正院	138	22	22	34	58	49	0.1	～5	然正院の義門玄関仏殿庫裡方丈そのほか堂塔少しも破損せず、ただ玄関ばかり瓦落ち潰れ申し候	静岡市史編纂史料一三一	36-387
静岡市葵区大岩町7-1	臨済寺	138	22	34	34	59	35	0.1	～5	安政元年甲寅十一月四日大地震あり、大門大破塀壊ル	臨済寺年表	36-526
静岡市清水区承元寺	承元寺	138	31	21	35	4	56	0.1	～5	軽微な様子	明応七年、宝永四年、嘉永七年地震史料	36-290
静岡市清水区（蒲原町）蒲原	竜雲寺	138	36	32	35	7	18	0.1	5～6	竜雲寺は地震の被害は軽く済んだが、安政四年の山崩れで皆潰れとなった	蒲原町誌	5-828
下田市3	長楽寺	138	56	33	34	40	17	0.1	～5*	長楽寺無難、少々痛み	プーチャチンと下田	36-30
御前崎市池新田	東泉寺	138	8	4	34	39	14	0.0	～5*	東泉寺無難	松下良伯の手記	36-650
静岡市葵区梅ヶ島	蓮久寺	138	20	34	35	14	37	0.0	～5	字名同所（本村）　寺弐ヶ寺　宝珠院屋敷キゆり割下り寺半つぶれニ御座候、蓮久寺之儀は無難に御座候得共、宝珠院屋敷かけ落候得は蓮久寺江落掛り申候場所ニ御座候	森威史氏提供文書	補遺別－462
静岡市清水区（蒲原町）蒲原1	光蓮寺	138	36	50	35	7	30	0.0	～5	大震災ありしも幸いにその災害を免るゆえに現今堂宇依然として旧観を存す	庵原郡蒲原町誌	36-158
沼津市幸町	永明寺	138	51	14	35	5	48	0.0	6	無難	下石田村名主伴右衛門記録	36-125
沼津市大門町	正見寺	138	51	20	35	5	47	0.0	6	無難	下石田村名主伴右衛門記録	36-125
沼津市内浦長浜	安養寺	138	53	34	35	0	59	0.0	～5	別条なし	内浦長浜大川忠徳家文書	5-665
沼津市内浦長浜	住本寺	138	53	42	35	1	3	0.0	～5	別条なし	内浦長浜大川忠徳家文書	5-665
下田市5	理源寺	138	56	16	34	40	18	0.0	～5*	痛みなき	プーチャチンと下田	36-27
下田市4-2-1	大安寺	138	56	27	34	40	33	0.0	～5*	痛みなき	プーチャチンと下田	36-27